

2017年10月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

迷いと悟り

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』（ちくま学芸文庫）／人間の分析（五蘊）に関する經典群／蘊相應／22味い（3）、23歡喜

(2) 主題

迷いが生じる経緯について、また悟りにいたる経緯について、学んでみたいと思います。

2. 味い

(1) 経文「味い（3）」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァアッティ（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、まことに、もし色（肉体）にして味いなきものであったならば、人々は色に悩まされないであろう。だが、比丘たちよ、色には、やっぱり、味いがあるがゆえに、人々は色に悩まされるのである」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 428）

(2) 悩みの発生

「味（あじわ）い」とは、快さを味わうことでありましょう。

経文は、色（肉体）が快さを味わうことがなければ、人々は悩むことはないであろうと言っています。

しかし、色（肉体）は、快さを味わいますから、そこから悩みが生じるのです。

(3) 執着

味いがある（快さを味わう）と悩みが生じるのは、何故でしょうか。

人は、快さを味わうと、再び、同じ快さを味わいたくなります。ここに、執着が芽生えます。

執着が生じますと、ものごとに対する正しい認識、正しい思考、正しい判断、正しい行動ができなくなり、悩みが生じるのです。

この場合の悩みは、三苦（苦苦・行苦・壊苦）のうちの、行苦と壊苦です。

3. 禍い

(1) 経文「味い(3)」

「比丘たちよ、また、まことに、もし色にして禍いなきものであったならば、人々は色を厭わしゅう思わないであろう。だが、比丘たちよ、色には、やっぱり、禍いがあるがゆえに、人々は色を厭い離れるのである」(同書、p. 428)

(2) 禍い

「禍(わざわ)い」とは、「悩みが生じること」でありましょう。

色(肉体)に禍いがあったら、色(肉体)を厭わしくは思わないだろうとあります。

しかし、前節で見た通り色(肉体)には悩みが生じます。これを禍いと受け取って、色(肉体)を厭わしく思うのです。

(3) 色を厭い離れる

色(肉体)に禍いがあるから、色(肉体)を厭い離れるとあります。禍いを厭い、禍いから離れたいのです。

しかし、色(肉体)の禍いを厭い、禍いから離れたいと思っても、色(肉体)の味いを求め続けていれば、悩みが絶えることがなく、禍いがあることはありません。

4. 脱出

(1) 経文「味い(3)」

「また、比丘たちよ、まことに、もし色にして脱出する道がなかったならば、人々は色から脱出することはできないであろう。だが、比丘たちよ、色には、やっぱり、脱出する道があるがゆえに、人々は色から脱出するのである」(同書、p. 429)

(2) 脱出する道

「脱出する道」とは、「悩みから脱出する道」であり、「禍いから脱出する道」です。

悩みから脱出する道がなかったら、ずっと悩み続け、禍いを受け続けなければなりません。

実際、悩みから脱出する道を知らないために、いつまでも悩み続ける人々が、少なくないのが現状です。

(3) 脱出する道がある

釈迦牟尼世尊は悩みから脱出する道があると言います。「脱出する道」とは、「四つの聖諦」と「聖なる八支の道」を指すのでありましょう。人々は、この道を学び実践すれば、悩みから脱出することができます。

5. 受・想・行・識

(1) 経文「味い(3)」

「比丘たちよ、まことに、もし受（感覚）にして味いなきものであったならば、……

比丘たちよ、まことに、もし想（表象）にして味いなきものであったならば、……

比丘たちよ、まことに、もし行（意志）にして味いなきものであったならば、……

比丘たちよ、まことに、もし識（意識）にして味いなきものであったならば、人々は識に悩殺されることはないであろう。だが、比丘たちよ、識には、やっぱり、味いがあるがゆえに、人々は識に悩殺されるのである。

比丘たちよ、また、まことに、もし識にして禍いなきものであったならば、人々は識を厭わしゅう思うことはないであろう、だが、比丘たちよ、識には、やっぱり、禍いがあるがゆえに、人々は識を厭い離れるのである。

また、比丘たちよ、まことに、もし識にして脱出する道がないものであるならば、人々は識から脱出することはできないであろう。だが、比丘たちよ、識には、やっぱり、脱出する道があるのであるから、人々は識から脱出するのである」（同書、p. 429）

(2) 受・想・行・識においても

前項では、色（肉体）に関する教えが説かれましたが、受（感覚）・想（表象）・行（意志）・識（意識）に関しても、同じ教えが説かれています。

6. 迷い

(1) 経文「味い(3)」

「比丘たちよ、人々は、まだ、この生を構成する五つの要素（五取蘊）において、このように、その味いはこれこれである、その禍いはこれこれである、また、それらから脱出する道はこれこれであると、あるがままに知るにいたらなかった間は、比丘たちよ、人々は、かの天神・悪魔・梵天のすむ世界、あるいは、この沙門や婆羅門や、人天のすむ世界から脱出し、その繫縛（けばく）から離れて、自由にして自在なる心をもって住するにいたらなかった」（同書、p. 429-430）

(2) 世界

「天神・悪魔・梵天のすむ世界」とは、人間が経験することのできない神話的な世界です。古代インドでは、そのような世界があると信じられていたようです。「沙門や婆羅門や人天のすむ世界」とは、私たちの住む現象世界です。

この二つをあげて、私たちの住む世界のすべてを表しています。

(3) 繫縛

「繫縛」とは、文字通り、縛られ繋ぎ止められることです。

私たちは、自分たちの住む世界で、生を構成する五つの要素の味（快さ）に執着し、縛られ繋ぎ止められてしまうのです。

(4) 自由・自在を失う

生を構成する五つの要素における「味」「禍い」「禍いから脱出する道」について知らない人々は、「味」に繫縛されて、自由・自在を失ってしまいます。

7. 悟り

(1) 経文「味い(3)」

「比丘たちよ、だが、人々は、ついに、この生を構成する五つの要素において、このように、その味はこれこれである。その禍いはこれこれである、また、それらから脱出する道はこれこれであると、あるがままに知ることができる。そうすれば、比丘たちよ、人々は、よく、かの天神・悪魔・梵天のすむ世界、あるいは、この沙門や婆羅門や、人天のすむ世界から脱出し、その繫縛から離れて、自由にして自在なる心をもって住することをうるにいたる」(同書、p. 430)

(2) 自由・自在に生きる

修行者が釈迦牟尼世尊の教えを聞いて、生を構成する五つの要素における「味」「禍い」「禍いから脱出する道」についてありのままに知ったとき、執着が滅して、何ものにも繫縛されなくなり、自由・自在に生きることができるようになります。

(3) 執着

経文から分かることは、執着が生じれば迷いに入って悩みが生じ、執着が滅すれば悟りに入って悩みから脱することができるということです。

8. 自由と自在

(1) 現代的な意味

① 自由

「自由」という言葉は、現代では次のような意味で使われています。

- ・ 邪魔をされない、束縛されないなど、外的な力によって行動を制限されることがないこと。
- ・ 何をしてもよいなど、行動にいかなる制約も受けないこと。
- ・ 法的には、法律の範囲内であれば、随意に行動してよいこと。

こうした意味を、自分に都合よく解釈して、わがまま勝手に振り回す人も少なくありません。

② 自在

「自在」という言葉は、現代では「自分の思いのまま」というような意味で使われています。

「自由自在」は、「ものを自分の意のままに取り扱うことができる」という意味で使われています。

(2) 仏教における意味

① 自由

仏教における「自由」は、「解脱して、何ものにもとらわれない境地」です。執着がないので、いかなる現象にも心や行動が引っかかることはありません。

これは、他律的に振り回されることなく、主体的に生きることを意味しているといえます。その意味で「自燈明」と通じるところがあります。

② 自在

仏教における「自在」は、何を行なっても真理に合っているので遮るものが無いことです。真理に生かされている通りに生きることです。

その意味で「法燈明」と通じるところがあります。

③ 自由自在

仏教における「自由自在」は、なにものにもとらわれず、真理のままに生きる境地ということになります。

9. 苦を歓喜する

(1) 経文「歓喜」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、色（肉体）を歓喜するものは、苦を歓喜するものである。苦を歓喜するものは、いまだ苦より解脱せず、とわたしはいう。

比丘たちよ、受（感覚）を歓喜するものは、……

比丘たちよ、想（表象）を歓喜するものは、……

比丘たちよ、行（意志）を歓喜するものは、……

比丘たちよ、識（意識）を歓喜するものは、苦を歓喜するものである。苦を欲喜するものは、いまだ苦より解脱せず、とわたしはいう」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 430~431）

(2) 苦を歓喜する

生を構成する五つの要素の味（快さ）を感じると、これに執着します。執着が満たされると歓喜が生じます。こうして生を構成する五つの要素を歓喜するのです。

ところが、生を構成する五つの要素に執着しますと苦悩が生じます。それでも執着し続けて、苦悩を増大させていくのです。これが、苦を歓喜するということです。

釈迦牟尼世尊の教えを聞かない人は、生を構成する五つの要素の味（快さ）に執着して苦が生じて、このことに気づくことができません。このために、苦から脱することができません。

10. 苦を歓喜しない

(1) 経文「歓喜」

「比丘たちよ、色を歓喜せざるものは、苦を歓喜しないものである。苦を歓喜せざるものは、すでに苦より解脱したのである、とわたしはいう。

比丘たちよ、受を歓喜せざるものは、……

比丘たちよ、想を歓喜せざるものは、……

比丘たちよ、行を歓喜せざるものは、……

比丘たちよ、識を歓喜せざるものは、苦を歓喜しないものである。苦を歓喜せざるものは、すでに苦より解脱したのである、とわたしはいう」（同書、p.431）

(2) 苦を歓喜しない

生を構成する五つの要素の味（快さ）に執着しなければ、苦を生じることはありません。

釈迦牟尼世尊の教えを聞いた修行者は、生を構成する五つの要素の味（快さ）に執着しませんが、苦を歓喜することはありません。

(3) 執着と苦悩

この経文でも、執着が生じれば苦悩が生じ、執着が減れば苦悩が減ることを述べています。